国語科 学習指導案

〇〇中学校
指導者　〇〇 〇〇

1. 日 時　　令和〇年〇月〇日（〇）第〇時限

2. 場 所　　2年〇組教室

3. 学年・組　　第2学年〇組（〇名）

4. 単元（題材）名　　短歌に親しむ、短歌を味わう（光村図書）

5. 単元（題材）の目標

・抽象的な概念を表す語句の量を増すとともに、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすることができる。〔知識及び技能〕(1)エ

・目的や意図に応じて、社会生活の中から題材を決め、多様な方法で集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができる。〔思考力・判断力・表現力等〕B(1)ア

・目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得て，内容を解釈することができる。〔思考力・判断力・表現力等〕C(1)イ

・文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。〔思考力・判断力・表現力等〕C(1)オ

・言葉がもつよさを認識するとともに、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする態度を養おうとする。「学びに向かう力、人間性等」

6. 教材観

本単元は、教科書の「言葉と向き合う」という項に位置する。言葉による見方・考え方を働かせる国語科において、たいへん重要な内容であると言える。「読むこと」の領域2時間、「書くこと」の領域3時間で構成するが、いずれも言葉に丁寧に着目し続ける学習となる。

短歌は、小学校5年生から系統的に親しんできているものである。とは言え、その扱い方は、発達段階によって異なる。中学2年で扱う本単元においては、短歌とはどのようなものなのかを今一度確認したりさらに理解を深めたりしながら、短歌で使われる言葉のよさやおもむきを味わい、読み手の思いや考えに寄り添えるようにしたい。

また、本校では生徒の語彙力がかねてからの課題となっている。語彙の力を獲得するためには、語彙の量を増し、活用できるようにする必要があるが、これは一朝一夕で身につくものではない。計画的な日々の学習の積み重ねが重要になる。そこで、本単元では、生徒が日々活用している語彙手帳を取り入れる。口語しか記されていない語彙手帳に、古語が記されることで、生徒の言葉に対する関心が高まることを期待したい。

このような活動においては、ICT 端末が有効だと考える。短歌は味わうために多くの部分を想像で補う必要があるため、写真との相性が良い。ICT 端末を活用すれば、自身の表現したい内容に最適な写真を探し出すことができる。また、文字の

修正や入れ替えが容易で、推敲しやすいだけでなく、つくった短歌についてのコメントも短時間のうちに寄せることができる。

このように ICT 端末も効果的に活用し、短歌の一つ一つの言葉に立ち止まり、言葉のもつよさを味わいながら語感を磨けるようにしたい。

7. 生徒観　省略

8. 指導観

第1時では、既習事項の確認をし、本単元で短歌をつくる見通しをもたせる。「短歌に親しむ」を教材として扱い、短歌の特徴を確認し、作者の感じたことを想像させながら、表現に着目させる。

第2時では、「短歌を味わう」を教材とする。「短歌に親しむ」では短歌が解説されていたため、短歌とそれに付随する解説文を基に想像を膨らませることができたが、ここでは解説文がない。生徒は、短歌の言葉から作者の思いを想像することになる。一つ一つの表現を確かめさせながら短歌を読み深めさせたい。

第3時は本時となる。まず、心に残っているものを題材とし、出来事や場面を決めさせ、短い文章にまとめさせる。その後、その内容を定型に当てはめて表現させるのだが、その際には、既習事項や語彙手帳を活用させる。そして、数種類の短歌をつくらせ、最終的に一つに絞らせるようにする。なお、それぞれの活動の要所要所で交流の時間を取り、友だちとアドバイスし合い、言葉をよりよく吟味できるようにする。活動の最後には現段階で最も良いと考える短歌に最適な写真を ICT 端末を活用して探し出し、その写真に短歌を載せさせる。

第4時、第5時は単元のまとめの時間とする。自身の短歌の表現を見直し、推敲させる。また、「短歌に親しむ」の解説文を参考にしながら、自身の短歌の解説文を書かせ、簡単なスライドを作成させる。そして、最終の第5時では、つくった短歌についてプレゼンをし、コメントし合う活動を行う。

9. 単元（題材）の評価規準（読むこと・書くこと）

知識・技能【知】	思考・判断・表現【思】	主体的に学習に取り組む態度【態】
抽象的な概念を表す語句の量を増すとともに、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。(1)エ	・「読むこと」において、複数の情報を整理しながら内容を解釈している。C(1)イ ・「読むこと」において、文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりしている。C(1)オ ・「書くこと」において、目的や意図に応じて、題材を決め、整理し、伝えたいことを明確にして短歌に表現している。B(1)ア	短歌の構成や表現の効果について考え、学習の見通しをもって短歌を創作しようとしている。

10. 単元の指導と評価の計画（全5時間）

◎：総括的評価（記録に残す評価）
○：形成的評価（指導に生かす評価）

時	学習内容	評価の観点			主な評価規準（評価方法）
		知	思	態	
第1時	・単元を見通し、めあてを共有する。 ・語彙手帳の活用について確認する。 ・「短歌に親しむ」を通読する。 ・短歌の基本的な形式やリズムを確認する。 ・短歌の情景を想像する。	○		○	知（ノート） 態（観察・ノート）
第2時	・「短歌を味わう」からそれぞれの短歌の特徴を考えて読み味わう。 ・本文中から、筆者のものの見方や感じ方がよく表れている表現を抜き出す。語彙手帳にも書き記す。 ・グループで一首選び、読み深める。 ・グループで考えたことを交流する。		◎	○	知（ノート） 態（行動観察・ノート）
第3時 （本時）	・実際に見た情景、心に残る出来事や感動したことなどから題材を探して短歌をつくる。その際、辞書や ICT 端末を活用して言葉を調べ、語彙手帳に書き記す。 ・ICT 端末を活用し、短歌に合う写真を選ぶ。 ・ICT 端末に短歌を記す。		◎	◎	思（ノート・語彙手帳） 態（行動観察・ノート・語彙手帳）
第4時	・短歌を推敲する。 ・短歌の解説を書く。 ・ICT 端末を活用して発表の練習をする。		◎	◎	思（ノート・語彙手帳） 態（行動観察・ノート・語彙手帳）
第5時	・プレゼンする。 ・自他の短歌を比較して、表現の特徴や効果についてコメントを書く。 ・ノート、語彙手帳を確認し、学習を振り返る。		◎		思（ノート・語彙手帳）

11. 本時の展開

（1）本時の目標

・表現の効果を考えて、自分の思いを伝える短歌をつくることができる。

・学習した表現の工夫などを参考に言葉がもつよさを認識しながら、表現の効果を考えて、自分の思いを伝える短歌をつくろうとしている。

（2）本時の評価規準

・「書くこと」において、表現の効果を考えて、自分の思いを伝える短歌をつくることができる。（思）

・学習した表現の工夫などを参考に言葉がもつよさを認識しながら、表現の効果を考えて、自分の思いを伝える短歌をつくるろうとしている。（主）

（3）本時の判断基準

十分満足できる状況(A)	おおむね満足できる状況(B)	努力を要する生徒への支援(C)
複数の表現の効果を考えて、自分の思いを伝える短歌をつくっている。（思）	表現の効果を考えて、自分の思いを伝える短歌をつくっている。（思）	5音、7音の言葉を集めさせ、短歌をつくる参考にするよう促す。（思）
複数の既習事項や語彙手帳を結び付けて表現の効果を考え、短歌をつくろうとしている。（態）	既習事項や語彙手帳を参考にしながら表現の効果を考え、短歌をつくろうとしている。（態）	語彙手帳や、ノート等にメモした表現に着目するよう促す。（態）

（4）本時の学習過程

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準 （評価方法）
導入 5 分	○前時の復習をする。 ○本時のめあてを確認し、学習の見通しをもつ。	・教科書とノートを基に、前時の活動を振り返らせる。 ・語彙手帳とノートが考えの材料になることを伝える。	
	表現の効果を考えて、自分の思いを伝える短歌をつくろう！		
展開 40 分	○ 短歌の題材を探し、ノートに構想メモを書く。 ○題材を集めた時点でノートを基に、考えた構想を交流する。 ○構想メモを基に、ノートに短い文章を書く。 ○ノートに数種類の短歌を書き、一首を選ぶ。	・実際に見た情景、心に残る出来事や感動したことなどから題材を探し、ノートにメモするよう促す。 ・辞書や ICT 端末を活用して言葉を調べ、語彙手帳に書き記すよう促す。 ・困り感をもつ生徒には、5音と7音の言葉を集めさせる。 ・交流時にはアドバイスしたり質問したりするよう促す。 ・現段階では定型を気にすることなく、文章を書くよう促す。 ・一度書いたら終わりではなく、何種類か書き、良いと思うものを吟味するよう促す。	【思】 表現の効果を考えて、自分の思いを伝える短歌をつくっている。（ノート・語彙手帳） 【態】 既習事項や語彙手帳を参考にしながら表現の効果を考え、短歌をつくろうとしている。 （行動観察・ノート・語彙手帳）

	○考えた短歌を交流する。 ○ICT 端末を活用し、短歌に合う写真を探す。	・アドバイスし合い、改善点があれば改善させる。 ・表現しようとする内容を補うような写真を選ぶよう促す。	
まとめ ５分	○ICT 端末に写真を貼り、短歌を書く。	・自身の構想メモと作品を確認させるとともに、次時の見通しをもたせる。	